



○ 時

この数年、私は入学式や卒業式の式辞で時間の過ぎてゆく速さについて取り上げています。簡単に言えば「時間の過ぎてゆく速さは誰に対しても完璧に平等であり同じ速度です。皆さんはどのように使いますか？」が入学式であり、「この一年間をどう感じていますか？長かったと感じている人はたくさんの学びを身につけてきたのでしょうか。速かったと感じている人は充実していたのでしょうか。」が卒業式です。これからもこの内容をしばらくは使おうと思っていました。するとある日、朝日新聞の天声人語に次のような内容のことが書かれていました。

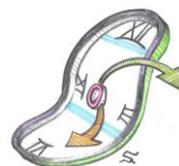
2026. 2. 12 付 朝日新聞から

天声人語

私たちは、時間に追われて、生きていく。あと5分で起きなければとか、次のバスは7分後だとか、つねに頭のどこかに時という物差しを置き、暮らしている。カチカチカチ。時計の針の音を聞きながら、思う。時を刻むとは何なのか▼漠然とした問いを抱え、千葉県船橋市の菊野昌宏さん(43)の仕事場を訪ねた。設計から製作まで、年単位の時間をかけ、世界で一つの時計を手作りしている独立時計師である▼「時代が違えば、異なる時間の読み方があります」。彼は言った。この国では一般に明治になるまで分も秒も使わず、24時間の一日ではなかった。江戸時代には夜明けと日暮れを境に、一日を昼と夜に分け、十二支などで表した▼だから、幽霊が出るのは丑三つとされ、昼の12時を正午と呼ぶ。季節によって昼と夜の長さは変化する。それに合わせ、十二支が示す時間の長さも伸びたり、縮んだりする。そんな揺れ動く江戸の時刻が分かる腕時計を菊野さんは作っている▼なるほど。変化する自然に向き合う生活には、江戸の時間が合理的なのだろう。でも労働時間で賃金を決めたり、電車を走らせたりする現代には、定まった時間が必要となる。そういうことだろうか▼時間は一つではない。そう思うだけで、何だか面白い。はて、もしも時を自由に操れるタイムマシンがあれば、過去と未来、どちらに行くだろう。「過去ですね。江戸の時計師の仕事を見てみたい」。笑顔で、菊野さんは言った。あなたなら、どうですか。

2026・2・12

過ぎていく速度は同じだが、長さは季節によって変わり、使い方感じ方はずいぶん違うのですね。江戸の時間と書かれていますが、平安時代ではどうだったでしょう。もっと昔の弥生・縄文時代は夜明けと日暮れで生活していたと思いますが、日が長くなったとか短くなったとかという会話は存在していなかったのでしょうか。ローマやエジプトの時代はどうだったのでしょうか。現代に生きる私たちはどう対応しましょうか。式辞の内容をお知らせしてしまったので、今年は少し工夫を加えなければならないかな。



○ 注意！

この欄は本来「自校自賛」でしたが、注意事項について紹介したいと思います。それは交通事故になりそうだった二つの事例です。

一つ目。私は電車通勤をしています。乗車する駅に向かうため押しボタン式の信号で青になるのを待っていました。いつも感じていることですが、黄色になっても急いで通過する車両は結構多いです。その日、横断者はなぜか私一人でした。いつものように青になるのを待ち、左右を確かめ、ゆっくりと横断していました。すると左から車が来ました。「今は完璧に赤だから当然止まるだろう。」とその車を見ていましたが、まったく躊躇することなく目の前を通り過ぎていきました。私とその車を認識していなかったらねられていたと思います。ほかに横断者がいたら数人犠牲になっていたかもしれません。

二つ目。これも横断歩道(押しボタンではなく自動式)です。前方の信号が点滅し始めたので私は立ち止まりました。すると左後方から自転車が私のすぐそばをそれなりのスピードで横断していきました。前方から左折しようとしていた車とその自転車に気づかず、あと30cmというところで通り過ぎていきました。私は自転車をじっと見ていて「ぶつかる！」と思いましたが、声は出ませんでした。もしも事故になっていたら車の運転手のほうに大きな過失があることになるのでしょうかけれど…。

なぜか私はこのような目撃者になることが多いです。皆さんの安全のために紹介してみました。